

(様式第1号)

### 新規調査研究計画書(全体計画)

調査研究課題	子宮頸がんの新しい診断法の開発
計画期間	平成19年度～21年度 3年間
背景 必要性	<p>子宮頸がん検診は、細胞診によるスクリーニング後に精密検査が行われる。茨城県の平成16年度の検診の結果、343人(精密検査を受けた人の36.8%)もの住民が異形成と診断されてフォローアップの対象となり、患者側、医療側、行政側それぞれにとって大きな負担となっている。異形成は、軽度の症例では50%で病変が消失していくこと、高度な場合でも進行がんとなる症例は30-50%であり、従来の形態学的観察では悪性化していく上皮内病変を同定することはできない。</p> <p>また、臨床の現場では、現在いくつかの腫瘍マーカーが利用されているが、子宮頸がんの早期診断にはほとんど役に立っていない。</p>
目的	組織(癌部と非癌部)や血清の蛋白質発現プロファイル比較を行い、子宮頸がんのバイオマーカー(癌予知マーカー、腫瘍マーカー)を探索する。
計画内容	<ol style="list-style-type: none"><li>1 少数の試料を用いてパイロット・スタディを行い、癌組織に特徴的な発現の仕方を示す複数のバイオマーカー候補を選別する。</li><li>2 多数の臨床サンプルを用いてバリデーション・スタディを行い、バイオマーカー候補の検証を行う。その中から、最も感度と特異度の高い蛋白質をバイオマーカーとして選定し、同定する。</li><li>3 同定された蛋白質をもとに抗原及び抗体を作成し、組織アレイを用いて臓器特異性を検討する。</li></ol>
研究目標 (達成しようとする 成果及びその活用 方法)	<ol style="list-style-type: none"><li>1 異形成の転帰を予測するための鋭敏なバイオマーカー(癌予知マーカー)の開発により、患者側、医療側、行政側それぞれの負担を大きく減少させる。</li><li>2 婦人科がんである子宮頸がんの検診受診率は著しく低いため、腫瘍マーカーの開発によって女性が受けやすい検診システムを構築する。このシステムの稼動によって受診率の飛躍的な伸びが期待されることから、早期発見と早期治療により子宮頸がんによる死亡者の減少を目指す。</li></ol>
実施上の課題及び対応	本研究は臨床サンプル及び臨床データを用いるため、県内の産婦人科医との共同研究として実施する。
備考	